

2025 年 1 月 12 日（日）14:00～

つくりかけラボ 16 トークイベント

「参加者と『知らないうちにはじまっていて、いつ終わるのかわからない』のためのワークショップ」を振り返る」

登壇：金川晋吾（本展作家）、内田ちよ子、川又健士、喜屋武綾香、草野椿、茂木健介、森下聖子（ワークショップ参加者）

進行：庄子真汀（千葉市美術館）

金川：みなさんこんにちは。金川晋吾といます。今回この「知らないうちにはじまっていて、いつ終わるのかわからない」をやろうと思ったきっかけについてお話しますね。

まずそもそもの「つくりかけラボ」って企画自体が、「つくりかけ」の状態です。よくいうもので、自分の中でやってみたいけどまだよくわからない状態のことをやらせてくれるっていう場なんです。公立の美術館でそういう場所があることって本当にすごいことだなと最近改めて感じているんですけど。

まずひとつめのきっかけとして「自分が写っている写真」への関心がありました。もうひとつは、いわゆる「作品」ではない写真、自分たちの身の回りにたくさんある写真への関心がありました。

「自分」というのが大きなキーワードですね。自分の姿って肉眼では見られない。でも写真には自分の姿が残っていると。しかも、それをほぼ自分では撮ってないわけですよね、自分の写真って。そういうものが数えきれないほどある。自分でも把握しきれないぐらい。そういう写真にまつわることについて何かやれたらなって思いました。

あとは、もう一つの大きなきっかけは、担当学芸員の庄子さんのおじさんが亡くなられて、そのお葬式でおじさんの人生を振り返るスライドショーを流すというイベントが葬式屋によって用意されていて、そのスライドショーのために写真を 20 枚選ぶっていうことがあったって話を聞いたことです。自分の人生をあらわす 20 枚の写真で選ぶってどういうことだろうって思いました。

写真と言葉の関係への関心というのもありました。写真を選んで見せるっていうことだけではなく、その写真について何か書こう、何か言葉っていうものをそこに介在させていきたいという思いがありました。

なんでそうやって言葉を書こうということが出てきたのかっていうと、理由はいろいろあるんですが、ひとつには写真ってものが断片的だからですね。写真を見ただけでは、それが何なのかやっぱりよくわからない、みたいなことが写真には起こる。

今回、今まであまり経験したことのないやり方で写真を経験しているなっていう実感があります。どうちがうかというと、壁面を使っているということですね。前後左右に広がりがある

面を使っているということ。一気に全体を見渡すことができ、本のようにめくっていくのはだいぶちがうかたちですね。

壁面であるがゆえに、対峙している感覚が強いのだと思います。そして、それを距離をとって眺めているというか。自分っていうものとの距離感が可視化されているように感じます。

はじめは自分の写真を持ってきて「並べる」という言い方をしていたんですけど、そのせいもあって一直線に並べていくイメージがあったかもしれません。ただ、作業していく中で、直線の流れも作りながらも、それに抵抗したいという気持ちが多くの人の中に生じてきたと思います。

実際にやっていくなかで何か思ったり感じたりしたことはいろいろとあったと思うのですが、それをお一人ずつざくばらんに聞いていけたらと思っています。

まずは茂木さん。ざっくりとなにか感じていることはありますか。

茂木：まず参加したきっかけは、私は写真はむしろ苦手な方で、美術をすごく見るという経験もほとんどないなかで、参加する前は金川さんのこともあまり知らない状態だったんですけど、タイトルの「知らないうちにはじまっていて、いつ終わるかわからない」とは自分自身のこと」というところにすごく惹かれて、参加したいなと思って応募しました。

というのも、自分自身は死ぬことに対しての怖さがずっとあって、写真を通して自分のことを見返すことで何かカウンセリング的なものができたらいいなっていう。全然趣旨とは違うところかもしれないんですけども、そういう動機で参加をされていて。ただ、実際やってみて、過去の自分の写真とかこれまでの人生っていうのを見返していく中で、そこに向き合えたかっていうとあんまりそうではなかったかなっていうのは感じています。

どちらかというと、こういう人生を提示したときに社会からどう見られるんだろう、とか。あまり意識したものではなかったんですけども、多分自分の壁の中で、見ている方が違和感を感じるというか人と違うなって思うのは、うちの兄に障害があって、そこの写真をさっと貼ったんですけども、ここについてあまり説明したくないなというか。これを特別なものとして扱いたくないな、でも説明しないとかえって浮くかもなということを、このワークショップの期間中ずっと考えていて。でも、説明されないだけでみんなこういう生活があるし、たまたま私がここで説明する機会を得られたけども、そういうものが社会にはすごくたくさんあるよね、みたいなことをすごく感じながら。事実としてこういう生活が世界中に無数にあるよねみたいなことを考えながら、そこに文字を入れるべきなのかとかを考えながら過ごす3ヶ月だったかなとは思っています。

金川：なるほど、そっか。自分のことが書けなくなったことによって家族のことを書くようになったと。ただ、家族のことを書くことによって、ネガティブなことばかり書いているんじゃない

ないかとか、どう見られるかをみたいなことを意識している自分をもう一回意識するようになった、と。

茂木：そうですね。今回3回に分けて、制作期間としてはもっと長い期間で自由にいつ来て書いてもいいという形式だったので、2回目のワークショップに来てみると、最初の頃に書いたことに対してこいつは何を書いているんだ、みたいなことを思ったりとか。私は家が電車でここから2時間ぐらいかかるので、あまり気軽には来られないなっていうところがあって、前回書いたことについて訂正したい、ツイ消ししたい、みたいな気持ちになるけれども、そう簡単にも来られないから……みたいな期間がありました。

金川：やっぱり書き直したいかもって思うのって、どのタイミングで生じるんですか。

茂木：そうですね。むしろ書いているときはすごくテンションが上がっているんですよね。他の方の作品を見て、こういうことを自分も書きたいと思ってワッと思いついたことを書くけれど、帰りの電車で熱が冷めてくるとちょっと趣旨と違うんじゃないかとか。本当はこういうことを書くと、自分の意図するところとは違う印象を与えてしまうんじゃないかというのを少し考えるっていう。

金川：なるほど。今ね、言葉にしてもらうと、逡巡とか後悔、自分のことを語りつつ語ったことへの後悔みたいな話がされているけれど、僕が読んだときにはそういう印象はあまり受けなかったです。でも、そういうずれがあるわけですね。

何か書くと、むしろそれだけじゃないんだ、みたいなことが言いたくなる、書きたくなるってことが起こるわけですね。それはまさに今日のトークイベントにおいてもそういう気持ちになりますね。今日は一人15分ぐらいしか時間はありますが、本当はもっと時間をかけてやりたいと思いました。

茂木：写真についてどう向き合うかという話も、他の方々からこれから出てくるかなとは思いますが、多分一番写真から遠い書き方をしているなと自分の壁のことは思っていて。写っている対象のことやこのシーンはこうでみたいなことよりも、私の場合、家族に対しての後ろめたさみたいなことをずっと書いているので、結構距離がある書き方になってしまったなっていうのは思っています。

金川さんが参加された東京都写真美術館の展示を見に行って、ファウンド・フォトっていうんですか、一般の方が撮られた写真がワッとあって、自由に手に取って見られるという展示があったんですけども、ああいうものを見ていても、語られない生活っていうのはすごくたくさ

んあるっていうのは感じていて、自分もこの点で結構近いものがあるのかなと思うんですね。

そこに対して文字を書くってなったときに、自分にしか書けない情報って何だろうなと思いい、どうしても自分の場合は写真から遠いものになってしまった。自分の記憶の中だけにあって、写真から読み取れない情報を書くっていうことで書いているけれども、これって本当に正しい書き方なのかなみたいなことはすごく感じていました。

金川：僕も参加している写真美術館でやっている展覧会の出品者に原田裕規さんという方がいて、その方はこういう個人の写真の山、誰の写真なのか、写っているのが誰なのかわからない状態で山のようになっていて、その中の１枚をぱっと見るっていう経験を作品にしている。今回の企画と同じような写真を扱いながら、両者はかなり真逆の方向に進んでいっていると思います。

普通に生活していたら見ないであろう茂木さんのアルバムの中の１枚をぱっと目にする。例えばこれだと、写真だけではおばあちゃんと赤ちゃんっていうことしかわからない。わからないけど、後ろに写っているものとかから、自分自身のことを想起するということが生じる。よくわからないはずなのにいろんなことを感じる。こういう写真を説明なしで見るっていう経験の面白さっていうのはたしかにあるわけですよね。ファウンド・フォトを作品に使っている作品というのはいろいろとあって、そういう場合、むしろ個人的なものが文脈から外されて、ただそれだけを見たときの面白さみたいなことをやったりしているんだと思うんですけど。

それに対して今回の企画は、写真に個人の話を書いたりしていく、言葉を与えていくということをやっているわけです。でもそれをどんどんできるだけ書いていきましょうっていう方向とも必ずしも違うんですよね。こういう写真は所有者であったり、この写真の文脈を知っている人とそうでない人とでは絶対的に違うものとしてある。でも昔の写真だから、実は当人にとっても実は写真とのあいだにけっこう距離があって、その距離みたいなことを書いたり書かなかったりしているわけです。あるいは、あとでお話しますが、川又さんなんかは、距離の話もしつつも、このイメージ自体にもうちょっと留まるみたいなことをやったりするんだと思います。

茂木さんは、写真１枚１枚をかなりよく見て選んでいる気がしました。だからそういう意味では、写真から離れるというよりも、まず写真をよく見て、どういう写真が自分にとって重要かとかをよく考えているように僕には感じました。

ご本人としては、写っているイメージというよりも、それに付随して出てくる自分の記憶とか、やっぱり映っていないことについて語りたくなっていると。そして、そうなってしまっていることにどこかうしろめたさを感じているわけですね。

茂木：見ている人から見ると、例えば仲睦まじいおばあちゃんと初孫の写真に見えるけども、実は仲が良くなく祖母が嫌な死に方をしてしまったりとか、そのギャップは単純に面白いなと思います。

あとはそうですね、立場の話でいうと、ワークショップが何回かある中で、写っている当時の自分のことを思い出そうとすると、その写真を前回のワークショップで見ていたときの記憶の方が強くなっていたりとか。写真を何度も見返すうちに、見ているときの自分の記憶の方が、写真に写っている自分よりもどんどん強くなっていくみたいな経験があったりして。記憶がどんどん塗りつぶされていく、上塗りされていくっていうのと、その写真を見ている自分の視点がどんどん増えていくみたいな状態が、重なってきて混乱するみたいな場面も結構ありました。特に子供の写真は記憶が薄いので、見れば見るほど捏造していくような感覚とかもありました。

金川：なるほど。それはめっちゃ面白い話ですね。

そもそも、このワークショップがどういうふうに進行了かという、1回目は、最初は自己紹介をしてもらい、その後白い壁が参加者それぞれに与えられて、写真を貼るところまでやってもらいました。あとの2回、3回で言葉を書いていくみたいな。それ以外にも、ここはつねにオープンになっていて、参加者の皆さんにはいつでも来てもらって作業してもらえっていう状態になっています。なので今日もまた少し書かれていましたよね。

茂木：そうですね。

金川：それは、こういうことが書きたいかもっていうことがまた最近出てきたんですか。

茂木：自分の書いている内容に対して離れすぎているなっていう気持ちがあったので、自分の写真を改めて見て、もうちょっと写真から読み取れる情景かつ自分しか知らない情報、例えば、ここは何歳のときにどこに行って撮った写真だ、みたいなことを補完しようかなとか。あと、家にいて、特にお風呂に入っているときにこういうことがあったとすごく考える3ヶ月間だったので、それを覚えておいて書いたりとか。でも壁の前に立ってみると全然違う印象があったりして、そうは思ったけど書くべきではない、みたいなこともやっぱりありました。

金川：ぱっと、あのこと書きたいかもって思う、っていうのはありますよね。見ているときじゃなくて、見ていないときにこの写真のことが思い浮かんだりしてきて。見ていないときに何かが起こる、みたいな感じが自分には結構ありました。見ているときに起こることもあるんで

すけど、見ていないときにこそ、この写真とのやり取りが唐突にぼっと起こるみたいなことがありますよね。

最後に、感想とか質問とか今の話の中で聞いてみたいこととか、参加者同士のやり取りでも全然いいんですけど、もしあれば。

参加者：今回のワークショップに参加される前と後で何か思い出したこととか、何か変化があったトピック、思い出はありますか。

茂木：そうですね、変化としては二つあって。一つは写真を見て書いているうちに、こういうことを思っていたんだっていう、うっすら自分で思っていたことがすごく明確になったというか。特に今回、母に対してのちょっと嫌な気持ちを書いたんですけど、これはうっすら自分の中にあったけども、言えなかったというか、言語化できていないし、あまり人に、特に身近な人には言えなかったことで。ここにそれが書けてしまうっていうのも面白い話ではあるんですけども。書いたことで、自分の思っていたことがはっきりしたっていうのは一つ変化としてあります。

あともう一つは、ここには今七つしか壁がないんですけども、こういうものが世界中にあるよねっていうことはすごく感じるようになって。最近、友達と話していて、「うちが住んでいる地域治安悪いんだよね」とカジュアルな感じで言われるのがずっと嫌だなんて思っていたんですね。もちろん住んでいる本人の気持ちとして、そういう気持ちはわかるんですけど。でも何で嫌なんだろうなって思ったら、こういうものを作っている中で、治安が悪いと感じる要因になった人にも生活がある、ってめちゃくちゃ当たり前のことなんですけども、そういう見えていない生活が全然あるよって、物量として見せられることですごく感じるものがあって。その嫌さだったのかなということ、つい最近思ったりはしました。

金川：ありがとうございました。つぎは内田さんです。

内田：内田ちよ子と申します。昭和 23 年生まれ、後期高齢に少し入っております。このワークショップの募集をネットで見te、これは絶対に自分も参加してやってみたいと思ってドキドキしていたんですけど、ラッキーなことに 6 分の 1 の中に入て、それはすごく自分の今までのタイムラインで嬉しいことでした。

最初に 3 回あって、とりあえず 30 枚とか何か、自分の気になる写真を集めてきてくださいって言われたんですよね。結構たくさんあるわけですよ、長いからね。とりあえずよくわからないから 30 枚選んできて並べたわけです、ここで。だってどうやって並べていいのかわからないので。並べてみて、そして他の方もいろいろ並べているわけです。

そうすると、他の方のアイディアも良いのがあって、ああやって並べてもいいんだっていうふうなことが気がついて。2回目はそれをフィードバックして、またここに足していくんですよ。それが2回3回あって。その時間が過ぎた中で、あれ足りないとか、これ足したらいいんじゃないかとかって、自分の物語が段階的にグレードアップしてくるっていうか、上書きされて足していくようになったんですね。だから、3回あるんだけどその間に来られるときにはちょこちょこ来て足していたんですよ。それで、やっぱり展示だからみんなに見てもらう、見せる要素もあるなと思ったんですけども、ただあんまり見せる要素を前面に出すと、バランスが難しいなと思ったんですよ。

だけどやっぱり私の場合は、この真ん中。私、猫が好きなんですけども、これはすごくラッキーでアマチュアの写真展でグランプリをもらったすごく印象のある写真で、私は猫と一緒にいるとすごくハッピーになれて力が出るようなところがあるので、これを真ん中に、たまたまうちに大きいやつが一枚あったんですよ。これを置いて、これを軸に展示しようと思ったんですね。それで、こっちとこっちでもうガラッと写真の雰囲気が、要は独身と家庭持っからの時代で写真がガラッと変わっているんで、ここで分けて展示しておこうと思ったんですね。

若いときの写真はタイムライン上で誕生したときなどを貼って、これが来て、あとは主人が猫を拾ってきちゃったところから始まったんですよ。3匹。そこから家庭の中の雰囲気が良くなって、うまく回るようになったんですよ。その辺の流れをずっと写真に撮っていたので、自分の好きなやつを貼っていったんですよ。

これをやってすごく面白かったのは、自分が生きていて、何が生きがい、何が私の芯になって時間を過ごしているのかっていうのはね、すごく明確になるようになったんですね。それまでは日記を書いてもふんわりしていたんだけど、あらすじみたいなものが明確に現れてきたっていう。

金川：写真を壁に貼ることによって？

内田：そう。何が楽しくて人生の時間を消費しているのかっていうのが、意外とより明確にわかってきたっていうか。写真を撮るってやっぱりハレのときとか、嬉しいときとか、綺麗なときとか、そういうときに撮りますよね。あんまり汚いところは撮らないですけども。そういう意味で、すごく明確にわかってきたっていうのが、今回やってみてよかったなと私は思いました。

日記も書いてあるんですけども、日記は画像じゃなくて文字なんですよね。それで写真は画像なんですけども。画像と日記、文字がコラボレーションすると、ビデオテープに音楽が乗るように画像も生き生きするし、中に書いてある日記の文章も生き生きして、そこから発信していることもより明確になってきて、自分自身が気がつかないようなことに気がつくんですよ。

ね。日常で何気なくやっていたことが、意外と私の人生に幸せをもたらしている大事なことなんだなっていうのに、これをやっていて気がついたんです。だからそれがよかったなと思っています。

金川：自分の今までの人生っていうものが、もうちょっと違う形で把握できたっていう。

内田：そうですね。人生って言っても時間だし見えないものなんだけど、そういうのを一覧にして画像にして、それからそこに文章があって、それを一面に載つけたことによって、一層今の自分とかが鮮明に自覚できたなってふうに思ったんですね。

金川：どういうことが鮮明になったとかってありますか。

内田：自分の中で何が自分にとって大事なことのとか、元気の素は何なのかってところがすごく明確になったから、それを大事にしないといけないし、これから未来っていうより残りの時間ですよ、私たちにとっては。それをどういうふうに正しく繋げていくか、たたき台じゃないけど、これに積み上げていったらいいかなと思ったんですよ。今まで生きてきた時間は可視化されていないけど、ここでバッチシ可視化されるっていうか、ある程度ね。それがすごく私にとっては良かったなと思っています。

金川：どういう写真を貼るかとか迷ったりしましたか。

内田：でももうね、好きな写真だけにしたんです。楽しい写真。だってそうしないとまとまらないっていうか、いっぱいあるから。そうしました。

金川：なるほどなるほど。自分が好きだと思える写真、それはやっぱり見るとあったんですね。これは他と違って好きだって思えるものが。

内田：適当なところもあるんだけどね。真剣に考えちゃうとあれなんですけどね。

金川：僕も今回やってみて、やっぱりどこかでとりあえず選んで貼っちゃうしかないっていう。こっちとそっちで絶対こっちの方がいいっていう必然性が僕はあんまり持てず、なんとなくで。

内田：それから金川さんのエッセイ集っていうか写真集を読ませていただいて。私は全然予備知識がなくて、開けたら写真と文章が1:9ぐらいで文章が多いんだってびっくりしちゃって。ああそうかって、やっと金川さんの事を理解したっていう。

だから写真1枚1枚の写真のインパクトってすごく大きいんですけど、その裏にあることっていっぱいあるじゃないですか。その文章量とか表現力とかっていうのが、発信を生き生きさせているっていう。それも繋がる場所があるのかなと思って。だから人に物を伝えるとか自分の考えをまとめるときに、写真は有効なアイテムだけど、それ以上に文章もすごく大事だになって感じました。文才がないとあんなにいっぱい書けないんですけども、メモでも何でもいいから書いていくっていうのは、写真と一緒にやるといいなと思いました。

金川：そうですね。写真が書くことを引き出してくれますよね。

内田：私たちの年代になると、葬式とかが多いんですよ。でも行けない人がいるわけじゃないですか。そこで、こういう写真をYouTubeみたいに流して、私の人生がどうこうでありがとうございましたっていうふうなサービスがついているんですよ。

金川：それは事前に作っておくみたいなことなんですか。

内田：葬儀屋さんに提出してくださいって言われて何枚か出すんじゃないですか。

金川：それは家族が出すんですか。

内田：そうそう。びっくりしちゃって。今こうなんだと思って。お香典持って行ってもわからないんですけど、それを見ればその人の印象がよくわかるので。だぶっているところがあるなと思って。そのためにも自分の写真がある程度ピックアップしておくのもいいかなと思って。そういうことです。ありがとうございました。

金川：ありがとうございます。何か聞きたいこととかあれば。後でまた最後に聞きますので。内田さんありがとうございました。

次は川又さんです。よろしくお願いします。川又さんはワークショップの最中から、写真に対して思い出したことなどを書いていくみたいなことをすることによって、写真から離れていってしまうように感じる、それは写真に対して「フェア」じゃないんじゃないかという話をされていて。その話がすごくおもしろかったし、参加者全員にとってもかなり刺激になったと思

います。

川又：自分がこのワークショップに参加して、写真を貼り付けていざ文章を書くってなったときに、自分のことは結構いろいろ書けるし、多分すごく無駄口みたいな感じでどんどん出てくると思うんですけど、それはそれでいいなと思いつつ、でもそれは1枚の写真から離れていく感じっていうのが、まずやり始めたときにあって。その違和感を言葉にしてみたりして、自分は「写真に対してフェアじゃない」という言葉でそれを書いたんですけど。

さっきのファウンド・フォトの話じゃないですけど、自分自身の写真をもう1回ただの写真に戻していくみたいな。写真に写っていることをわりと忠実に、写真に写っていることから読み解けることを書いていくのが、「写真にとっては」いいんじゃないかなというのがまずありました。

それで書いていくんですけど、それもそれで違うんじゃないかっていう段階にも行くというか。写真そのもの、写っていることから読み解けるものを書いていくこと自体にも疑念が生まれて、そうすると何が言いたいのだろうっていう、次に。自分のもとに帰ってくるのかわからないですけど、そこで言葉が見つからなくなるという経験が、今一番強く残っていますね。

金川：なるほど。おそらく僕は自分のことを説明したい、語りたいっていう欲求が強くあるほうだなと思って。でも、あんまり積極的にそういうことをしたくないって人もいますよね。

ただ、僕自身のなかにも葛藤みたいなものはあって、説明したいっていう欲求があると同時に、何でそんなことしたくなっちゃうんだろうって不思議に思ったりもしています。

僕は自分のことを説明したいって欲求が強くありながら、そこで自分の全体像みたいなものを作ろうとすることには抵抗があり、一つのわかりやすい物語にはやっぱりしたくないという気持ちがあります。

川又さんの場合はどうですか。自分のことを説明したいみたいな欲求があるのか、あんまりそういうのが湧かないのか、どうなのでしょう。

川又：あんまり湧かないかもしれないですね。面白くないような気がする、という直感がある。

金川：面白さが優先順位として上にあり、自分のことを語ってわかってもらうみたいなことはそんなに重要なことではないってこと？

川又：ない、そうですね。自分のことを語った面白さよりも、写真が1枚あってその面白さのほうが……何を面白いとするかが難しいんですけど、自分は面白いと思いましたね。でもそ

れは、いま話していて、すごく第三者的に見ているなと思いました。自分がこれをやっていること、このワークに対して純粋にのめり込んでないのかもしれないなとも思ったんですけど。でも、そういう態度も取れるワークショップだなと今思いました。

金川：そうですね。やっている行為自体をもう一回引いて見ていたとしても、だからと言ってその行為にのめりこんでいないとは必ずしも言えないわけですよね。のめりこみつつ、どうしても引いて見てしまうということは両立する気がします。

気になる話はいろいろあるのですが、まずは「アンダーコントロール感」について聞きたいです。「このワークショップを通してそのアンダーコントロール感が人生の中で強くなってしまっているんじゃないかという気がしてきた」って書かれていますよね。自分のことを対象化して見て語る、そのことへの嫌だなっていう感覚が書いてあって、その嫌だなっていうところがすごく気になるというか。

川又：今自分は30歳なんですけど、例えばこのワークショップに参加した年齢が60歳だったとして、60歳の自分の写真があっても、そこで覚えていることと、30歳の自分が今思っていることってそんなに変わらないんじゃないかなっていう。客観的になれる深度みたいなものって、変わるのかなというか。60歳になっても自分を語る距離感ってあんまり変わらないんじゃないかなっていう気が、この行為をしていて思いましたね。

それがアンダーコントロールっていうか、例えば今後の人生で大きな事故に遭って、それが完治して、元の生活戻って、その事故を振り返ったとしても、自分のその経験に対しての語り方は今のここでやっている感じと一緒にんじゃないか。一緒とは言い切れないんですけど、近いというか癖みたいなものは、一緒なんじゃないかな。難しいですけど。その感じがアンダーコントロール感っていうワードになった感じですかね。

金川：それは今回この作業をして、昔の自分と今の自分の連続性を感じたということとはまた違う？ 昔の自分から今の自分は結局自分のコントロールの範囲の中にいるなっていうことを今回のワークショップを通して実感したと。そして、それが今後も続くのかもと思ったということ？

川又：そうですね。さっき金川さんが言っていた、来るたびに自分の語り方の違いに気付かされる、驚くみたいな経験は自分はあまりなくて、視点は一定で定まりながらワークをしていたのかなと。それが60歳になっても同じなんじゃないかなっていうか。

金川：そして、それに対してちょっとネガティブに感じたというか、嫌だなんていう気持ちになったというか……。

川又：ネガティブじゃなくてもいいなと今思いました。でもネガティブだとも思っています。

金川：文字という物質になったものをもう一回時間が経って見たときに新鮮さを感じるということがありました。僕は「東京藝術大学の学生になるなんて夢にも思っていなかった」って書いていて、それを今日見たときに新鮮さを感じました。そういうふうにならずに思っていたけど、文字になっているのを見たときに何か新鮮さがあったんですね。そんなことを思っているけど、実際に口にだすのはちょっと恥ずかしいと思っているからなのか。

川又さんは、自分が書いたのを見て、ああこんなこと書いたんだな、みたいな感覚にはあんまりならない？

川又：写真を見て自分を語るのと、写真を見て写真からわかる情報を書くって間で揺れ動いていた話をしたんですけど、この真ん中の写真を見たときの経験は、どちらでもなかったなと思いました。まず単純にいいなって思う感覚があって、それは写真としていいなとも思うし、自分の人生の中の１枚としてもいいなと思う。素直に写真を、今の私が見ることができている。素直に、うがった見方じゃなく、見られていることが心地よかったですね。そういう感情が出てきたことが嬉しい。嬉しいって書いたんですけど、その感情はこのワークの中で特異、独特なものとして残っています。それが何なのか、まだちょっとかわらないですけど。自分のことを語ることも違うし、写真のことを語るのとも違う感触はありました。

金川：もしくは、その両方ができているということかもしれませんね。

この一枚の写真を見て生じる感覚とか感情とか記憶について語ることと、でもそれがこの写真から離れていかないってということが、この写真の場合には起こっているわけですね。

それはこの一枚の写真がもつある特別な良さがそうさせているのか。同じようにその写真から想起される感情とかを語ったとして、写真とのあいだに生じる距離感は、そこに留まっていると感じられるかどうか、写真ごとによってちがうというか。この写真の場合は離れていかないというのは、なんとなくわかる気がします。

庄子：残り３名いらっしゃるので、15時10分ぐらいまで休憩を取ります。川又さんありがとうございました。

(休憩)

金川：後半始めたいと思います。喜屋武さんです。

喜屋武：喜屋武です。よろしくお願いします。

金川：喜屋武さんはカメラのスタジオで働いていらっしゃるわけですが、今回こういう自分の写真を扱ってみてどのようなことを思いましたか。

喜屋武：そもそもこのワークショップに参加したいなと思った理由が、自分の見られ方をずっと気にしてここまで来た感じがあって、子供の頃からかわいかわいっていうふうに言われて育ってきて、それに応えた方が価値があるみたいな。多分ジェンダーにも関わってくるんですけど。それに一生懸命応えようとしちゃって、人の目にかわいく映るように過ごしてきちゃった。

でも、それに対する嫌だなっていう気持ちがあって、呪縛みたいなものから逃れられるようにはなってきたけど、じゃあ素の自分は写るのかどうかと思って、真顔で写る写真とか、スマートフォンを開けたときにたまたまカメラが作動して撮れた写真とかを集めたりしていて。自分らしさみたいなものは何か、どう写るのかみたいなのが見たくて参加しました。

今回、写真を並べるときに選ぶ基準の指定がなくて、セレクト作業がすごく大変というか。基準がないから、何をよりどころにして選べばいいのかわからなくて。最初は自分を象徴するような写真を選んでみようと思って見ていたんですけど、過去の自分だから自分らしさも何もないなというか。子供の頃の自分と今の自分では見た目とかも変わっているし、象徴的も何もないなと思っちゃって。

それで、思い出すことがある写真、自分が見たことない写真、両親から送られてきた写真の中でこんな写真あったとか、このときこうだったとか、話したいことがある写真を選ぶようにしました。

金川：見られる自分っていうことについて、かなり踏み込んで書いていらっしゃるなと思って。見られている自分への意識についてかなり書かれていますよね。

あともう一つ喜屋武さんが問題にされていて興味深いと思ったのが、写真に写っていないということについて。「写真には直接写っていないから他の人には見えないかもしれないけど、私には感じられることだから、私には写っているものとして書く」みたいなことを書かれていましたよね。

喜屋武：先ほど川又さんのお話でも出ていたみたいに、写真に対する誠実さみたいなもの、写真をどう扱うかみたいなことを、この作業をする中で結構考えますよね。言いたいことがあって、それを説明するための説明図としての写真の使用というか、自分が言いたいことに対して写真を従属させるのは、写真がかわいそうだなっていう気もしちゃって。あまり説明的な写真にはしないでおこうとか、説明的にはならないでおこうとは思ったんですけど。

かといって写真に写っているものを書くことが写真に誠実な態度だったとして、例えば、こういう写真を見たときに、知らない人から見たら中学生が写っているとしか思わないかもしれないけど、自分が見たときにはすごく嫌だなとか、きついなとか、自分に見えていることがある。だから、自分が見えていることを書くことも、そこの延長線にあるんじゃないかなとは思っています。

金川：写真に対して誠実でありたいみたいな気持ちってわかるんですけど、不思議だなとも思っていて。写真からいろんなことがばあっと思い浮かんで来て、それを書いていくということ自体は、本当は別にいいとか悪いとかとくにはないはずですよ。でも、何か写真から離れていくような感じがして、そこに違和感を覚えるというのは僕にも起こりました。

でも言葉があることで初めて他の人にも「見えてくる」ということってありますよね。こっちから見たら本当に楽しそうに見える写真が、本人にはすごくきつく見えているっていう話は、やっぱりこうやって言葉でやりとりするからこそ、他人にもわかることですよ。

喜屋武：ここら辺の中高とか大学初期の辺りの写真は見るのがとてもつらいというか、うわーってというか、見たくないものとして置いていたもの。1回目にはあまり写真を持ってこられなくて、そのときに金川さんが、自分がきついと思う写真でも入れてみたら面白いと思うよと言ってくださって、じゃあ見るか、みたいな。

そうしたら、見ていくうちに結構見慣れてくる。最初はうわーと思って見ないでおこうと思っていたものも、しょうがなく見ていると見慣れてきて、昔の自分や写真と自分の距離感が変わってくる感じがあって。「うわ、きつ」と思って入れていなかった写真を冷静に見られるようになってきたら、きついなと思っていたのは、かわいく良く写ろうとしてしまっている自分の作為性みたいなものが自分の顔から読み取れてしまうからで。自分はわかっているからそれが嫌だけど、冷静にちゃんと友達の顔とかも見てみたら、意外とみんな決めにかかっているというか、よく写ろうとしているのが見えてきて。今までそんなに気にならなかったというか、自分だけ……

金川：自分だけがすごくそういうことをして、他のみんなは……

喜屋武：そうですね、みんな自然に振舞っているのに自分だけ取り繕っていたって思ってしまったんですけど。

金川：僕がきついのも入れてみたらって言ったのは、写真の場合は一瞬「きつい」と思ったものでも、ゆっくり時間をかけて見ているうちに慣れてくるということが起こると思ったからなんです。やっぱり慣れの問題は大きいとっていて。今回はこうやって大きな壁があって、そこに貼ってじっくり眺めることができる、そしてさらに何か書くことができるわけですね。だからこそ、写真を見ているときに生じる自分の反応自体をもう一度考えることができるのかもしれない。

喜屋武：言葉を書くことが加わると、自分の過去を再定義する感覚というか、ふんわりこういうふうに思っていたみたいなことをあえて書くことで、何か決まっていく感じがして。

過去の自分って違う人というか、半分自分だけど半分違う人みたいな、この時代この時代、中学時代とか高校時代っていうふうにわかれていて分断されている感じがあったんですけど。見慣れてきたり言葉で書くことによって、何か繋がりみたいな……自分の体感ですけど、ちっちゃい膜みたいなもので分断されていたいくつもの過去の自分みたいなものが、1個の体で今ここにいるみたいなように実感としてわかってくる感じも面白かった。

金川：なるほど。それはすごくおもしろいし、そう言われると自分も似たような感覚はあるなと思いました。自分というのは、何年かごとのかたまりとしてある。それは均等ではなくて、時間的に長かったり短かったりする。それらが連なって自分というものが構成されているという感じはありますね。

そして、今回の作業で、そのあるかたまりの自分の存在を以前よりも受け入れられるようになった気がします。自分の場合だと、例えば「20代のころの自分」というようなかたまりがあって、それをより客観的に見ることができて、「まあこんな自分だったけど、それはそれでもう今さら変えられないしょうがないよね」という気持ちになれたと思います。

今回の企画は、オープンダイアログやカウンセリングのような、ケアやキュアに主眼を置いた営みにつながっていく可能性を秘めたものだと思います。そこに重点を置いてやることもできるというか。ただ、今回は美術館でやっていて、表現という側面について考えることもやっている。今回はケアやキュアのことをやるのか、表現のことをやるのか、それは曖昧なまま、両方やるうという感じで今回やっていましたね。

喜屋武：そうですね。

金川：時間ですね。喜屋武さんありがとうございました。では次は森下さんです。よろしくお願いします。

森下：このワークショップに参加しようと思った動機なんですけれども、両親が亡くなってから、家中の写真とかいろんなものを片付けている中で、写真がすごくいっぱい出てきて。とりあえず全部まとめておこうと思って箱に入れている中で、やっぱり見ちゃうんですね。いろいろ見ていると、すごく面白かったりして。あと、モノクロのネガが出てきて、それを自分で焼こうと思って暗室でプリントして。そこで、写真を20枚集めてっていう今回の募集の要項を見て、これうちにいっぱいあるぞと思って、やってみようっていうふうに思って参加しました。

初回のときに、まずこの壁のここについていうことを言われて、ちょっと「えっ」と思って……最初は大きくても模造紙くらいのスペースだろうとか、あるいは何かめくる形になるんじゃないかと勝手に思っていたんですが、それがこのようになって戸惑いまして。とりあえず最初に貼ってみようとおっしゃっていただいたので、とりあえず貼るだけ貼って、なにを書いたらいいんだろうとか思っていました。壁に向かって書くっていうことが、すごく外に発するっていう感じがして。自分のアルバムとかそういうものには書いていると、すごく内側という感じだったんですけど、壁に貼るっていう行為が自分をすごくさらけ出すっていう、私にとってはこれまた苦手な行為だったんですけど。それをやることで、何かちょっとさらけ出している感じがしました。

その中で、私が今、千葉市美術館でボランティアをしていたり、千葉に住んでいたりする中で、知り合いがちょっと来るとか、人から見られるっていう……誰にも参加するとは言っていないんですけど、たまたまいろんな人に見つかってしまい、「出していたね」みたいなことをいろんな人から聞いて、これに対する反応がちょこちょこ入ってきたんです。それが意外に面白くて。途中から、「もっと書きちゃえ」みたいな気持ちに（笑）。その反応をもらったことで、逆にもっと書きちゃおうと思って、いろいろ書き始めたところがありました。

ボランティアを始めたのが去年の4月からだったので、その人たちにとっては自己紹介みたいな印象を受けて、高校の友達とか半世紀ぐらい付き合いがある人からは、全然知らない部分を見たみたいな感想もいただいて。こういうふうに表に発することの面白さとか不思議さっていうか……そういう感覚がありました。

金川：どうでしたか、やってみて。こうやって自分のことを見ることによって、自分が統一されるような感じがあったか、あるいは何か違和感が覚えたりしたか、どんな感じでしたか？

森下：私は自分に関しては違和感があんまりない。普段からなくて。統一される方に感覚としては近いかなと思います。

あと、壁の下に時間と自分がいた場所を書いたんですけど、私は引っ越しが多くて、今千葉に住んでいながら自分が千葉の人間とか、生まれたのは福岡なので福岡出身とかっていうのはあまりなくて。土地に対する定着した何か、みたいなものがないんですよね。それが自分の中の違和感といえば違和感なので、ここにずらっとこう並べてみました。

金川：ここが自分の故郷、ホーム、ベースだと思える場所がないと感じているんですね。

森下：ないんですよね。今とりあえず千葉に住んでいて、それになりつつあるというか。もうそうしよう、と自分で思っているところがあって。そんなことも、やっているうちに何となく思って書きました。

金川：知り合いがこれを見て、そこでもらったコメントによって「もっと書いてもいいじゃん」と思ったっておっしゃっていたのが印象的でした。言える範囲でいいので、どういうことを言われてどういう心の動きがあったか聞いてもいいですか。

森下：私「森ちゃん」って呼ばれていたんですけど、「知らない森ちゃんがいた」って言われたんですね。別に私は隠しているとかそんなことはなかったんですけど、高校の友達って長くは付き合っても、ずっと一緒にいるわけじゃないから。ポツポツとしかこの長い間も話していないから、細かいことは喋ってないし、悩み事みたいなことも別にこんな苦しかったみたいなね、介護のことなんかも言っていないしとか思って。ごめんなさい、うまく言えないんですけど、そんなふうに友達からは見えていたんだなっていうのが。

金川：「自分の知らないあなたがいた」って言われるのって、よく考えるとかなりおもしろい、不思議な経験ですね。

森下：さらけ出すつもりで、さらけ出してはいたような気はするんだけど、そうでもなかったんだなと思ったんです。

金川：意識していなかったけれども、普段は出ていない自分がここにはすでに出てしまっているということが起こったわけですね。だったらもうどんどん出してみてもいいんじゃないかみたいな気持ちになられたと。

森下：そうですね。もういいや、と。別に隠しているつもりはないけど。思ったこと書きちゃう、みたいな気持ちになりました。

金川：その前は、自分のことを語るっていうことに対してもうちょっと押し留めるものがあった感じですか？

森下：押し留めるっていうか、さっきハレの写真とおっしゃっていましたが、ハレの日のことを書いた方がいいっていう気持ちがあって、だから最初はアフリカのことや京都に住んだこと、そういう自分で頑張ったこと、「こんなことやっちゃいました」みたいなことを書いたんですけど、そうじゃないこともさらけ出していこうかな、と。

金川：そういう作用があったっていうのはすごくおもしろいですね。あとは森下さんの写真は、ご本人を含めて写っている人たちが本当に楽しそうなのが不思議ですね。すごく魅力的。これは、そういう写真を選ばれているっていうことなんですかね。

森下：最初にセレクトしているときにボツ写真をうっかり持ってきてしまって、本当に選んだ写真を置いてきてしまったんですね。それを貼ってみたら、これもいいかと思って。

金川：お酒を飲んでご機嫌みたいな写真がたくさん貼られていてそれがすごくいいですね。もし持ってくる写真を間違えなかったら、また全然違うものになっていた可能性はあるんですか。

森下：もっとよそ行きな感じになっていたと思います。

金川：なるほどなるほど。そういうよそ行きなものとよそ行きじゃないものっていう区別があったんですね。

森下：そうですね。

金川：いろいろと話してくださりありがとうございます。つぎは草野さんです。

草野：草野です。よろしくお願いします。

金川：草野さんはこの中で一番若いのかな。

草野：そうですね。

金川：だから「自分が写っている写真」って言ったときの時間の幅は一番狭くなってしまうということもあるのかもしれないんですけど、幼少期のことについて書いてくださっていて。あとは、写真を残しておかないと、という話がとても印象的です。実はこの中の写真には、プリントされた写真を撮ったもの、写真を撮った写真がかなりあるんですよね。

草野：そうですね。幼少期の写真のほとんどが、自分が高校生のときに実家で写真を見つけて、残しておいた写真です。このワークショップに参加したいと思ったきっかけでもあるんですけど、私の両親が5,6歳くらいで離婚をしていて、それ以来もう15年20年近く父と会っていません。18ぐらいまで実家にいたんですけど、父の存在が実家の中ではなかったことにされていて。私も弟と妹がいるんですけど、誰も口に出さないような家で育ったっていうのがあって。なので、私の小さい頃の写真とかが全部母によって見えないところに置かれていたのを、中学生ぐらいのときに見つけたんです。衝撃じゃないですけど、なんというか自分ってこういう感じだったんだっていうのをそこで初めて知って。

金川：そっか、それまでそういうイメージに触れてこなかったっていうことなんですか。

草野：小学校の課題とかがたまにあったりして、そういうのでは何枚か……全くではなかったと思うんですけど、でも本当に大量の写真が隠されていて。押入れとかに。そこに父や父方の親戚、父方の親戚にもそれ以来一度も会っていないので、そういうのが写っているのが衝撃で。高校生になって自分でスマホを持てるようになったときに、なんで撮ったんだろうと思うんですけど、多分それを残しておきたくて撮っていたのがあって、そのときのデータをプリントしたものが幼少期の写真のほとんどになっています。

金川：今回、こうやって写真を貼ってなにか書くという経験はどうでしたか。

草野：あまり人に言ってこなかったことを自分は書こうとしていて、家族のことだったり。二度と会うことはない人っていると思うんですけど、そういう人と過ごした時間がなかったことにならないんだと、写真を見ると感じさせられる。それがいいのか悪いのかは断定できないんですけど、写真のそういう特性みたいなものが怖くもあり、自分はおもしろいところかもしれないと思っていて。なので、その気持ちに一回向き合って、自分で思っているけれどあまり

人には言ってこなかったことを書いてみようかなっていうのを、この壁やってみました。

金川：今までとは違うチャレンジングなことをやっているってことですよね。

草野：2回目のワークショップのときにも言ったんですけど、すごく怖いとっていて。こんなに大きい壁で開かれていて、誰でも見られる美術館でこういうことをやるのはちょっと怖いけど、おもしろいけど、怖いけど……みたいな気持ちでずっと（笑）。書いていいのかな、ともかも思っていたし、こういうことを書いてると変なんじゃないかとか、そういう葛藤はずっとありました。

金川：書いていいのかなっていうのはすごくわかりますね。そして、「書いていいのかな」って思うときには、同時に「でも一体誰に対していいのかどうかを心配しているのだろう」という気持ちにもなる。

草野：そうなんです、誰に対して思っているんだっていうのがあるんですけど。家で下書きを書いた上でここに来ても、この壁に書くまでにはまだ時間がかかるというか、こういうことを書こうと思って来たけど書けない、書くのにすごく勇気が要るなと思うことが、私は結構多かったです。

金川：書いて何が起こるのかは未知数なことだったりもしますよね。書くときの不安って、一つは書かれる当事者のこと、自分のことだったら良いけど、自分のことを語りながらどうしても家族のことも出てきたりして、これを家族が読んだらどう思うんだろうっていう不安がまずあるのかなと思います。それに加えて、見に来た人がどう思うのかっていうのもありますよね。

あともうひとつ、僕の場合は、内容自体どうこうというより、こういう振る舞いをする人間ってみっともないんじゃないか、みっともないことをしている奴みたいに見えるんじゃないか、みたいな不安があります。いや、そういうことを実際にしている他の人に対してはそんなふうには思わなくて、むしろ本当に励まされるんですけど。

多くの人が語っていないこと、そういうことってあんまり喋ることじゃないよって言われているようなことを喋ることにつきまとう不安ってものがあるんだと思います。でも、同時にそういうことを話すおもしろさ、何か未知のものに踏み込んでいくようなおもしろさもありますよね。草野さんが怖いけど面白いっておっしゃっていたことにはすごく共感します。草野さんは不安を感じながらも、しっかり書かれているなと思いました。

草野：そうですね。途中まではこういうことを書いていいのかとか、書いて何か面白いのかなとかいろいろ迷いがあったんですけど、でもこういうことをする機会もなかなかないので。あまり人に話してこなかったけど、多分誰かに言ってみたかったのかなとも思っていて。なので一回迷いとか葛藤とかを無視して、書きたいことは頑張って書いてみようかなっていうところがあった。

でも実際書いてみて、何週間か置いてまた見てみたら、引いた目線でも見られるようになってくるというか、意外と大したこと書いていないかもとか（笑）、これ書くのきついなと思うながら書いていたことも、そういう人もいるかっていう。客観視まではいかないですけど、違う人の目線で見られたりはできるようになって。意外と大丈夫かもっていう気持ちに、ここ最近はなっていました。

金川：そういう行為を僕もやっているところがあるなと思いました。さっき言っていた「東京藝大に自分が行けるなんて」っていう独白を書くって、実は結構恥ずかしくて。でも言いたかったことでもあって。そして、実際に言ってみると、自分のなかでいろんな変化が生じていて、それがおもしろいですね。そのおもしろさや恥ずかしさを今はまだ咀嚼していますね。

面白いっていう方向だけの話じゃなくても全然いいので、今回言わないでおいたことを言ってみたことで何を感じているのかについて、もう少しお聞きしてもいいですか。

草野：書けてよかったなとは個人的には思っていて。私の「草野」という名字が父方の名字なんですけど、父はもう知らない人で、生きていいのか死んでいるのかも正直わからない。それなのに私はずっと草野でいるのが変ってというか、変だけどいい名前だなと思っていて。

そういう、繰り返し思ってきた「でもそうなんだよ」みたいなことが、写真に映っているような気がして。もう会わない、知らない人が私のことを撮っている写真が結構あったりとか。それがやってみてよりはっきりしてきて、自分にとっては面白かったというか。写真って変だけど面白いなという気持ちになっていました。

金川：そういう生きていく中で何回思ったかわからない、ずっと繰り返し思っているある想念みたいなものが、一つ物質になって自分も見ちゃうみたいな。だからこれもカウンセリングとかそっち系の話に近いことかもしれないけど、そっちだけの話でもないのかな。思っていることが自分の中にあったときのずっと繰り返される感じと、物質として一回定着しちゃう感じの違いっていうものがありますよね。

繰り返しになるけど、僕は「藝大に～」っていう自分が書いた文字を見たときに本当に不思議な気持ちになって。こんなふうに書かれているのがあるなっていうのがね、これは何なんだろうっていうのがちょっとありましたね。

人に読まれるということに関係なくこれは成立しているのか。あるいは見た人に何か感想をもらったりすることがやっぱり関係しているのか。どうなのでしょうね。他人の目というものが一体どういう作用を及ぼしているのか。

書くときに、これを見る誰かの目を意識していましたか。

草野：多少は……。全く考えずに書いていたわけではないと思います。ある程度自分が書きたいことを書こうっていう気持ちで書いたけど、全く気にせず書いてだけではないというか、多少なりとも誰かがこれを読むことを想定したからこそ、これを書いていいのかなとか迷ったりしたっていうのがあるので。

全然知らない人に読まれるより知り合いに読まれる方が怖いっていう気持ちとか。これを読む人が自分とどういう関わりの人なのかっていうところでも、見方が変わってくるだろうなと思ったし、これを読んだ誰かが何かネガティブな気持ちになるんじゃないかと、そこは別に考えなくてもよかったのかもしれないんですけど……。

これを読んで誰かが何かを思うことで、もしかしたら自分も傷つくんじゃないかみたいな気持ちがあったから、傷つきたくないという気持ちはありました。

金川：その感じ方の順番、わかります。結局これを読んで嫌な気持ちになるかどうかは相手のなかで起こることであって、それはコントロールしきれないものですよね。なんにせよ、こういう個人的なものをいきなり突きつけられるのは嫌だっていう人はいないわけではないですよ。でも、それはそれこそ慣れの問題だったりすると僕は思っています。こういう個人的なものに接することに慣れていないというそれだけのことではないかと。

庄子：最後に 15 分くらい、みなさん全員でお話しいただければと思っています。参加者の方は前に集まっていたいただいてもよいですか。

金川：なにか質問等あれば。あるいは今一巡してみて思ったこととか、何かあればちょっと話していただけたらと思うんですが。

質問者①：喜屋武さんのところで「書くことを思いとどまる」という話があって、あとは金川さんから「いろんな写真を見たときにきつい写真が出てくる」という話があったと思うんですけど、思いとどまって書けなかったっていう場面と、思いとどまるけどえいって書くっていう場面があると思っていて。えいって書いたときに「傷つき」が起こるのかなと思ってですね。個人的なことを話していく行為っていうのは「傷つき」が起きるのかなと思って、そう

いうことはあったのかなと聞いてみたいです。

喜屋武：行けるぎりぎりまではやったけれど、例えば中学のときににあった嫌なことを詳細に書くとかはやっていなくて。どこからどう書いていいかわからなかったし、今は書けないなと思っちゃって書かなかった。けど、えいって書いたときは、多分できるからやった部分もあると思う。「傷つき」っていうよりかは、すっきりっていうのがあるんだろうなと思います。

金川：僕もそうですね。本当に嫌で書けないなってことは多分書いていないんだと思います。無意識って言葉は難しいですけど、やっぱり意識できないことっていっぱいあるので、やろうとして意識できる範囲って限られているし、自分が意識していなかったものが表れていることもある。その両方が起こっていると思います。

あと「傷つき」についてはあまりよくわからなくて。意識できていないだけなのかもしれませんが。自分としては、やりたいことをひたすらやっているっていう感じです。しんどかったり面倒くさかったり疲れてきたりはするけども、行為自体は楽しいことでした。

質問者②：みなさんのお話を聞いていて、このワークショップではわからないことがわからないまま、そのままでもいいというか、そういう形で答えを出さなくてもそれが心地よさに繋がっているなと見ていて思いました。

先ほどの質問と重なる部分があるのですが、とはいえ個人のことを思い返すとか、家族のことを思い返すっていうことが、難しかったり危ないことに繋がる可能性もあるなと思っていて。金川さんにお伺いしたいんですけど、こういうワークショップを開くときに、どういうことを意識していたのかなとか、あるいは話しづらかったりとか、それを見た人がっていうところで金川さんの中に気づきがあったのかなと思うんですけど。このワークショップを通して、家族を語ることや見ることへの気づきみたいなものを聞きたいなと思います。

金川：それで言うと、はじまる前の段階から、何かこういうことが起こってはまずいということのをいろいろと想定して、それに対して配慮しておくみたいなことはあまりできていなかったと思う。ただ、その都度その都度お話するようにしていました。

庄子：草野さんや茂木さんは、客観的には共有しづらいと思える内容も結構書かれています。が、そのあたりはどうですか。

茂木：私は正直、家族のことをすごく書いたので家族には絶対見に来てほしくないと思っていて、家族も遠方に住んでいるので来ないし、写真は用意してもらったんですけど何をやってい

るとかは一切言っていないです。とはいっても関係の中で私がこう思っているっていうことを基本的には書くようにはしたので、具体的にどういことをされたとか……書いているか、書いていますけど、やはり中傷にはならないようにと思いながら書いてはいて。具体的に事前にガイドラインがあったとかそういうことではないですけど、書いている最中からみんなお互いの展示を見ながらやっていったのかなってというような気はしています。

金川：最初に自己紹介のときにいろいろとお話をしてみたときの印象として、皆さんがそれぞれの自分の塩梅みたいなものをちゃんと持っているというふうに感じられました。だから、まあ大丈夫だろうという安心感があったんだと思います。

むしろ今日思ったのは、こういうゴールもよくわからないような負荷がけっこうかかることをやってもらって大丈夫かな、悪いな、みたいなことを折にふれて思っていたんですけど、それはちょっとこちらの過度な心配というか、傲慢だったかなという気がしています。参加者のみなさんはやりたいという意志をもって参加してくれているわけなので、とりあえずまずは信頼してやってもらえばいいんだと思います。

質問者②：最初にある程度グラドルールみたいなものがあったっていう……最近はあると思うんですけど。でもそれをやることによって書きたいことが書けなくなったり、それを意識しすぎちゃって逆にできなくなることもあるなって思っていたので、場所作りがどうなっていたのか気になって。参考にしたいと思います。

金川：そうなんですよね。それを今回はやっていないんですよ、こういうことは書かないでおきましょうとか。ありがとうございます。

質問者③：2点だけ気になったことがあって、まずこの書くっていう作業のときに「嘘ついてやろう」と思った方はいらっしゃいますか。僕だったらめちゃくちゃ嘘書くというか。写真1枚1枚を見たとしても、記憶なんてわからないから、写真を見たことを起点にすごく嘘を書く。フィクションを立ち上げるって言った方がいいかもしれないです。それは物語とも違う、口マンを作るっていうわけではなくて、例えば喜屋武さんが自分の卒業アルバムの写真を見たときに、かわいらしく写りたかったんだろうっていうのはある意味フィクションだと思うんですよ。そのとき思っていたかどうかっていうのはわからないじゃないですか、もはや。もはやわからない中で、現在から過去を見てそのときのことを書くっていうのはフィクションを立ち上げるってことなので、ある意味、本来の自分みたいなものとは反対のことを実はやっているのではないかとまず思ったんですよ。なので、僕だったら嘘書きちゃうっていう。オーブ

ソワークショップで、三枚選ぶやつがあったじゃないですか。あれも完全に嘘ついている（笑）。嘘っていうか、その写真の特性に合わせた嘘を書くわけですね。

というのがあるので、嘘をつこうと思ったのかどうかというのがまず一点と、もう一点は、現状こうやって壁になりましたよね。これは思考実験なんですけど、今もしも、自分が外に出た瞬間に車に轢かれて死んだと。そこで残ったこの写真たちが見られるっていうこと、今は展示だから見られるっていうことに耐えているけど、普通だったらこんなパーソナルなアルバムは見せられることはないわけじゃないですか。でも、現状それが残っているわけですね、資料として。それを見られるということに対してどう思うか。

喜屋武：嘘をついてやろうっていう気持ちはなくて、むしろ嘘にならないように書こうと思ったんですけど、当時の日記とかそういうものを捨てちゃっていて。参照するものがないから想像して書いたり、今の自分を起点に「思っていたはず」ということを書くようにしていましたね。嘘ついてやろうというよりは、私は本当に近いことが書いてあるのを読む方が面白いと思ったので、よりリアルに書けるようにしていました。

草野：私も嘘を書こうとは思ってはいなくて、幼少期のことはそもそも記憶がないので、必ずしも全部本当のことが書いてあるとは思わないんですけど。小さい頃の視点はもう忘れてしまっているけれど、思い出せる限り、今の自分の視点から見てどう思うかをなるべく真面目に書こうとは思ったので。さっきの最初にガイドラインがあったのかという話とも繋がるんですけど、わりと書きたくて書いたんで、これを書いたことで何か起こってもすみませんという気持ちで。そう思えるぐらいには真面目に書こうという気持ちでやっていました。

金川：僕も嘘をついてやろう、嘘をつきたいという欲求がなくて。だから安田さんのその欲求がわからなくて（笑）。何でそんなことしたくなるのか。

質問者③：フィクションや嘘に対する態度が多分違うんですね。

金川：別の何かが立ち上がっていくことへの喜びみたいなものが、そういうのがあまり得意じゃないからっていうのもあるのかもしれないですけど、あんまりなくて。ただ、いざ実際に書こうとすると、覚えていないことはいっぱいある。こういうことは書けそうと思って書き出すと、実際のところ曖昧にしか覚えてなかったりして。そうなるように書くしかなくて、それが創作と言えど創作なのかもしれないけれど、そのとき自分が軸足を置いているのは自分がどう感じていたかとか、こうだっただろうっていうこと、つまり「あったこと」が軸にあるんだと思います。

でも、そこにさらに「こういうことが言いたい」が加わってもきますね。それは「本当にあったこと」とか自分の実感とはちょっと違う。肉まんの皮をずっと剥がして食べて、餡だけ残して嬉しそうに見ていた学童の人たちのエピソードっていうのがあるんですけど、それはやっぱり何か言いたいことが自分のなかにあって。言いたいことがあるからそのエピソードを書いている。という時、それはフィクションなのかもしれないけど、僕が書くときの意識としては、フィクションを立ち上げてやろう、嘘を書こうというより、「あったこと」をその通りに書こうという感じですね。あったことに立脚しないと物事をうまく書いたり考えたりできないという感じかなと思います。

森下：私は、嘘とかフィクションとかそういうことは全然浮かばなかったです。とにかく写真に関わることをどんどん書いていこうと。フィクションはないです。あと、死んじゃったらこの写真をどうするかっていう話は、私はまとめている段ボールとかそういうものを、私が死んだら箱を開けずに全部捨ててくれって。やるとしたら私の甥っ子姪っ子がそれをやらなきゃいけないので、迷惑かけないように一切箱を開けずに捨ててくれと言っています。

金川：それを見られることへの抵抗があるんですか。

森下：見られることの抵抗ももちろんあるんですけど、それを片付けるっていう労力を考えます。私が今それで、箱を捨てられずにいるんですよね。ネガとかも含め。その労力を、自分の子供ならともかく甥っ子姪っ子にそれが行くことは本当に申し訳ないと思うので、そこを考えています。

茂木：嘘のところなんですけど、態度としてはわかるなと思いつつ、僕の場合は語りたさが勝ってしまったなっていう感じであまり嘘は書いていないです。ただ、書いているエピソードも全部写真から立ち上ってきたかっていうと、鉄板ネタじゃないですけど、割と人に話していることとかがあるんですよね。やっぱり話していくうちにどんどん洗練されていってしまうので、口当たりが良い嘘になっているんじゃないかなみたいなことは疑問に思いながら……。なので、鉄板でこれ面白いだろうなと思いつつも書かないことも出てきたりとか、その葛藤はありました。

川又：自分は途中で嘘のことは考えました。書けるなと思ったんですけど、このワークショップの性質というか雰囲気、いいのか悪いのかわからないですけど、言葉を書いて写真と自分と向き合うみたいなその真摯さが、言葉にはなっていないけど求められている空間というか

……。

金川：確かに。安田さん（質問者）みたいな人がファシリテーターをしていたらまた違う空気感が出るのかもしれない（笑）。

川又：例えば一人でここに来て作業すると、無音の空間でナイーブな感情にどンドンなっていくのもそうなんですけど、その環境設定によって、嘘をつきづらい環境だったのかなとは思いました。

金川：それはたしかにそうかもしれないですね。

内田：私の場合は嘘を書くっていう発想は全然思い浮かばなくて、何か楽しいことばかりピックアップして書いて貼ったような気がするんですけども。逆にそういう発想もあるんだって気がついて、そこに展示してあるやつも全部フィクションで書き直してみる、そういうのも面白いと思ったんです。全部あれするのは難しいかもしれないけど二、三個そういうフィクションを入れて遊んでも面白いなって思いました。

それから、ここで公にして小さな印刷物になるとかっていろいろ聞いていると、自分の中にある挫折とかいっぱいあるんだけど、それを別にここで書かなくてもいいんじゃないかっていうのがあって。それは心の奥に閉まっておいて、とりあえずここでは楽しいことを発表するっていうふうにしました。でもそういう闇がある方は、そういうことを書くことによって闇が消えて、ワンステップするっていうんだったら、それはすごくいいんじゃないかな。あと、冷たい言い方かもしれないんですけども、ご本人がすごく気にしていると思っても、はたから見ると知らない人の悩み事っていうのは、本人が思っているほど大げさに考えなくても、そんなに悩むことないんじゃないかって思っちゃうところもあるんですよ。有名人はトラブルがあると集中されて叩かれたりするけど、私達一般人の悩み事と違って本人は重くあれなんだけど、そんなに重く考えなくてもいいんじゃないかなってすごく思った。これから先の人生があるから、もう荷物は下ろして。だから気にしない方がいいと思いますよ。だから頑張ってください（笑）。

金川：二つ目の質問、森下さんは答えてくださったけどみなさんはどうですか。

喜屋武：私は見られてもいいなと思って展示しています。

草野：私はこの展示だからこういうことを書けたという部分があるので、これをわざわざ見にくようと足を運んでくれる人に見られる分には全然構わないと思うんですけど。不特定多数というか、それこそネットに流されるのは嫌というかきついで、死んだあともそれはやめてほしいです。

金川：僕はもう全然（笑）。今までの活動もあるので、とくにここに書いていることに関しては。

茂木：これは趣旨としては今この空間より広がっていったときにどうかみたいな話ですか。そうですね。私は正直、家族以外だったら誰に見られてもいいなと思っています。書かれている人に対しては、本人にあまり言いたくないことを書いてしまったので、その人以外だったら誰でもいいですっていう感じです。

川又：僕もいいかなと思いました。それ以上でも以下でもないっていう感じです。

内田：私はもう残りの時間が短いですね、皆さんより。そうすると溜まっている写真をどう処分するかっていうのもね、結構あれで。現物写真だったら捨てられるんですけど、パソコンにいっぱい入っているんですね。ああいうのをどうしようかな。でも別にかさばらないから、孫とかが大きくなったときにご先祖様が何をやっていたかっていうのに残してもいいかなと思うんだけど。世の中、パソコンの中にいろんな情報がいっぱい溜まっているから、あれってどうなのかなと思って。写真撮って楽しんでいっぱい溜まるんだけど、その後どうなるのかなって。全部捨ててくれって言ったのがすごく新鮮で。そのあとのことも考えなきゃいけないかなって思っています。皆さんは未来があるから、今いっぱい溜めてもいいんだけど。私はパソコンの中のいらないものを捨てているんです、少しずつ。皆さんとはちょっと違うから参考にならないかと思いますけど。

森下：処分する側のことを考えちゃうんです。自分が残してほしいとかそういうことじゃなくて。例えば顔が写っているものとかお人形とか顔があるものって捨てるのを躊躇しませんか。する方多いと思うんですけど。私はそれができなくていっぱい溜めちゃうんです。例えば私が帰りに死んじゃってこれが残っていて、美術館の人は処分することを考えると思うんですね。そういうことを考えて、私は気にせず処分してほしいと思っています。

庄子：そろそろ時間なので、このあたりにしようかなと思います。長くなりましたが、今日ご登壇いただいた金川さん、そして参加者のみなさんにあらためて拍手をお願いいたします。